

1 本調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

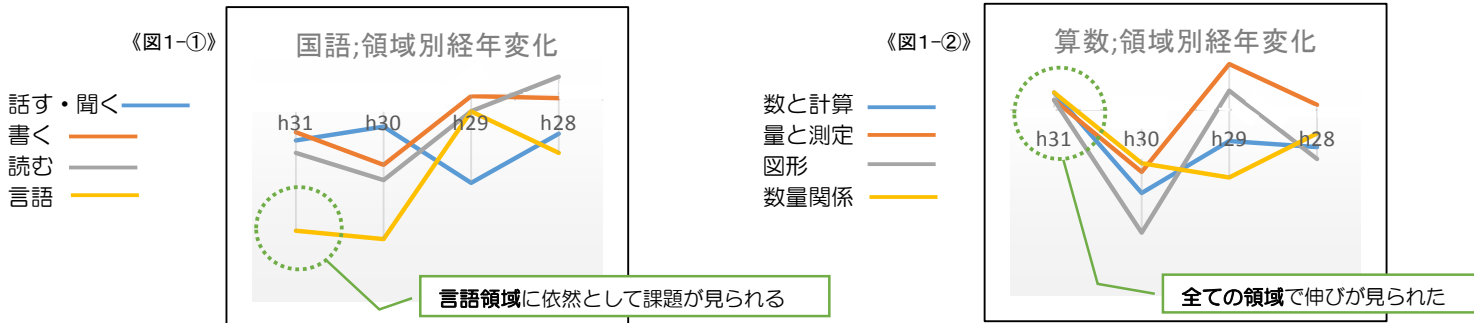
2 本校の教育方針と学力向上に向けての取組(重点)

本校では、学校教育目標実現の切り口として、児童の自尊感情を高めることを念頭に置いている。子どもにたっぷりの愛情を注ぎ承認を常とすることで、児童自らが自分自身を信頼し自信を持てるよう育成するのである。そのことが、自ら鍛え助け合える豊かで強い心、自ら学ぼうとする向上心を持つ『自立』した児童の姿に繋がると確信している。

本校では過去3年間、算数科を中心に授業改善を行い、児童の『自力解決』の時間と場を確保することを柱としてきた。児童自らが自力解決したくなる課題づくりを行い、「め・じ・と・ま・ふ」(めあて明確に、じりき解決、ともだちと交流、まとめる、ふりかえるのステップ)の授業形態を取り入れてきた。そのことの成果や課題を検証する中で、言語力に課題が見られ、意見交流場面での停滞に繋がっていることが明らかになった。つまり『伝える力』を伸ばす取組を重点とすべきとの結論である。

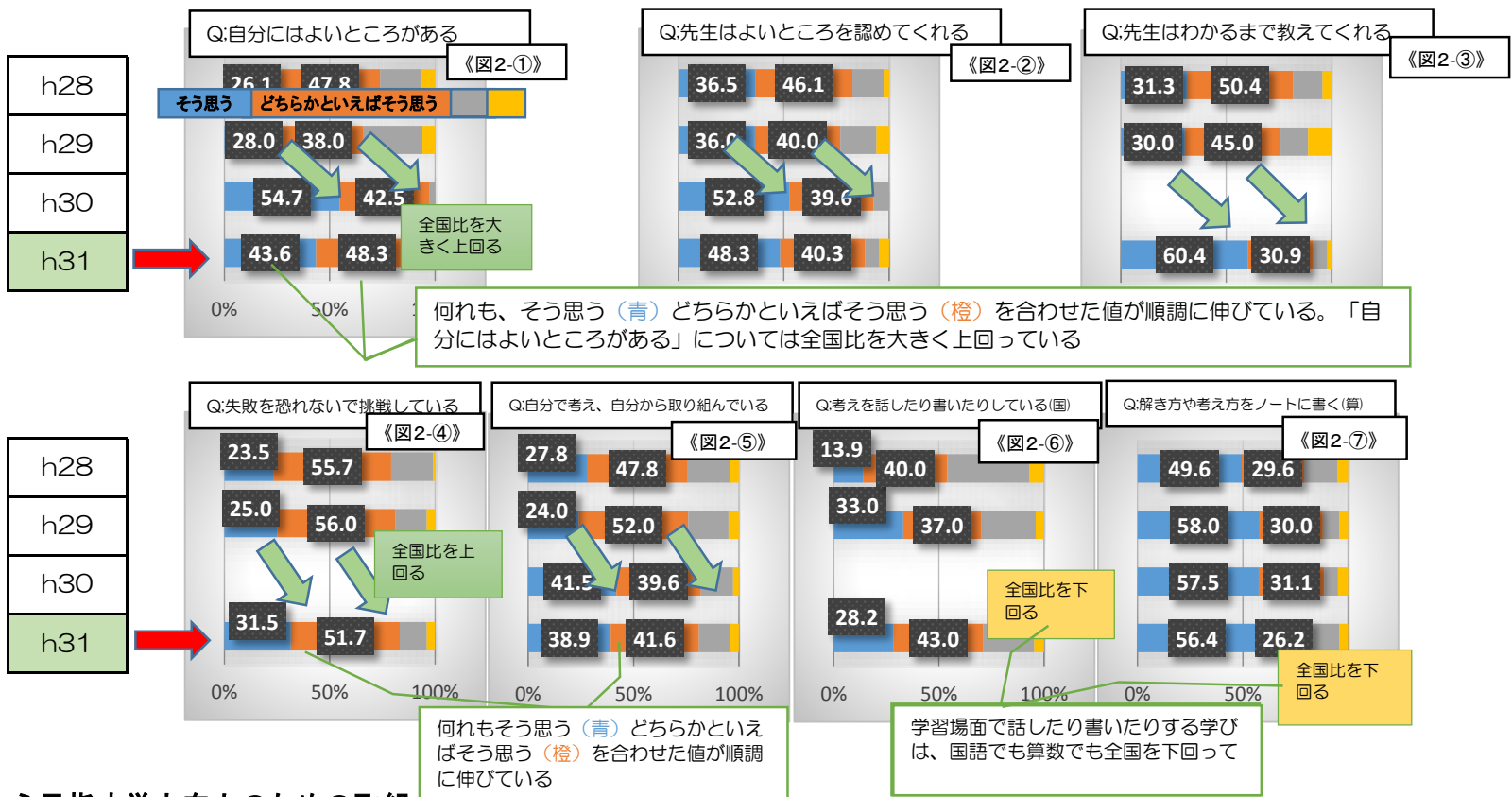
3 今年度の調査結果(学習に関わること)について

今年度は国語・算数ともに、基礎的な知識を問うA問題、応用力・活用力を問うB問題の区分がなくなり、ABが統合された形で実施された。本校の結果を見ると以下のような現状であった。国語科の結果からは言語領域や言語に関する知識を中心に課題が見られ《図1-①》、この領域は全国平均値を基準に見ても大きく下回っている。また、算数科では全領域・全観点で伸びが見られた《図1-②》。これらは何れも全国(県・市)平均値を上回る結果でもある。このことから、算数科で授業改善に取り組み、自力解決を重視してきた成果が表れてきているといえ、継続して取り組むべきであること、言語力向上に焦点を当てた取組をいっそう強化する必要があることが明らかになった。また、正答数分布から国算に共通して見えてくることとして、中位群の伸びが不十分であることが挙げられる。つまりいている児童への支援とともに、どの子にも伸びを保障する授業改善が必要といえる。



4 学習状況(生活に関わること)の経年変化による本校の傾向(成果と課題)

最近4年間の学力及び学習状況の経年変化を調べてみると、本校のこれまでの取組とその成果を考察することができる。明らかな特徴としては、本校の指導方針に沿った教師の姿勢として、『子ども一人ひとりをしっかり認め』、『丁寧に教えている』こと《図2-②③》。それに伴って児童の『自尊感情が育っている』こと(これは全国平均値と比較しても突出して高い)《図2-①~③》。また、学習場面では、自力解決の場を設け、解決したくなるような課題設定を工夫していることで、児童の『失敗を恐れずチャレンジ』し《図2-④》、『自分で考え、自分から取り組む姿勢』が高まり《図2-⑤》、算数科の全領域・全観点での大きな伸びにつながっていること《図1-②》。逆に、話したり書いたりする学びが両教科とも少ない傾向にあり《図2-⑥⑦》、言語領域や言語に関する知識(国語科)については全国平均値と比較しても低い傾向にあり《図1-①》、本校の課題といえる。



5 これから目指す学力向上のための取組

本調査で測定できるのは学力の特定の一部であり教育活動の一側面であることは大前提であるが、今回の調査結果から見えてきた本校の強みを生かしつつ課題を解決していくために、以下を学力向上の重点として系統的な取組を目指すこととした。

- ① 自尊感情を高めるための取組を継続・充実させ、児童自らが様々な課題に向かい解決できる力へつなげる。
- ② 「書く活動」をいろいろな場面で意識して広げ、深め、読解力・文章表現力を伸ばす。
- ③ 学級会活動を大切にし対話的な学びの基礎を育むと共に、総合的な学習の時間等を核に表現活動のさらなる充実を図る。
- ④ 習熟度に配慮して、全ての児童の学力を伸ばすための授業改善を進める。